

## 21回演奏会曲目解説

### 1 グリーティングス トゥー ヘルマン (Zimmermann-Frankfurt)

トムトムを2個ずつ小から大へと並べた3人と大太鼓奏者による打楽器四重奏の作品。

テュッティーあり音の組み合わせあり、かつジャズ的なフィーリングもある曲です。作曲者はドイツ生まれで、ジャズドラマーでもあり、CAVAZA 打楽器四重奏団のメンバー。

タイトルは「ヘルマンへの挨拶」の意で、彼の師である Hermann Schwander への感謝の気持ちを表しています。1987年の作品。

### 2 インタープレイ (Southern Music)

3つの楽章からなり、1楽章は様々な太鼓類を主に使い、模倣したり相互に影響し合ったりと対位的に書かれた作品です。2楽章は点描風に色々な色彩の音がばらまかれた後次第に広がり、マリimbaとヴァイブラフォンの対位的に書かれた旋律の流れが頂点を極めた後次第に減速しオープニングの響きに戻り、3楽章に突入します。躍動するオスティナート音型がたえず曲を引っ張り、後半は駆け足で突進してフィナーレに向かいます。曲は3つの部分に分かれているものの続けて演奏されます。1978年の作品

### 3 マリimba スピリチュアル (音楽之友社)

作曲者は、「この曲は1983年末から1984年始めにかけ、当時アジア・アフリカで進行中だった悲惨な飢餓を思い、前半はその犠牲者達へのスタティックな「魂鎮め」、後半は「魂振り」を願ってダイナミックに作曲した」と楽譜に記しています。

マリimbaに打楽器3人を配したこの曲は、マリimba協奏曲といっても過言ではありません。マリimbaは5オクターブの楽器を想定していますが、このオーケストラともいべき打楽器パートは初演がアムステルダム コンサートホールで行われたためかカウベル、トムトム、ティンパニなど西洋を起源とする楽器で書かれています。もともとの楽器の選択に関しては、3人も金属打楽器で始まり、次いで木質、後半「魂振り」の部分が皮質と規定され、おおよその音高を相対的に記譜されているにすぎません。

今回は後半のリズム型が秩父屋台囃子を基にしていることもあり、チャンチキ、締太鼓、大太鼓といった日本の伝統楽器を使用しました。作曲者は1930年徳島県生まれ。1984年の作品

### 4 ストーンウェーブ (Chester Music)

この曲はソロバージョンも六重奏バージョンもありますが、今回は三重奏バージョンで演奏します。

左側の奏者は11個の金属の楽器、右側の奏者は5個の記の楽器+5ドラム+1ベースドラムで、真ん中の奏者が左右両方の楽器を合わせた上にベースドラムをさらに重ねた楽器編成になっています。続けて演奏される3つのパートからなり、それぞれ日本風にいうと序・破・急ともいえる構成なのですが、全編特異な編成が生み出す強烈な響きに圧倒されます。1957年ノルウェー生まれの作曲者による1990年の作品。

### 5 打楽器組曲 (Belwin & Mills)

弦楽四重奏とか木管五重奏というのは編成がイメージしやすいのですが、打楽器四重奏は今回の他のプログラムがそうであるように、曲ごとに様々な楽器が使われ、決まった編成の曲というのはほとんどありません。

この曲は四つの小品からなっています。一曲目が堂々たる太鼓の王様の行進 (March for Membranes)、二曲目は愉快的木の戯れ (Dance O' Woods)、三曲目がかわいい金属のささやき (Metallics)、そしてみんな揃ってのフィナーレ (Finale) といった趣の曲です。

### 6 3x3 (未出版)

木の鍵盤を持つ打楽器：マリimba、。チャイムなど金属の鍵盤を持つ打楽器、。膜を叩く太鼓類を中心とした打楽器の3種類の楽器グループにそれぞれ3人の奏者が配され、計9人で演奏されます。

マリimbaのアンサンブルから始まり、その響きを金属打楽器が受け継ぎ、さらに太鼓類に引き継がれ、やがて全楽器が一体となって頂点への向かう音の響きをデザインした曲です。作曲者は1968年生まれで打楽器奏者でもあります。